

令和4年度 東京都自立支援協議会セミナーの報告について

令和4年12月12日に東京都自立支援協議会主催のもと、東京都自立支援協議会セミナーが東京都庁で開催され、事務局が出席したため、セミナーの概要を報告する。

1 セミナーのテーマ

「当事者が安心して暮らすために ～地域の社会資源を活用して～」

2 第1部「基調講演」

(1) 講演タイトル・講師

「入院・入所等からの地域移行について ～地域の社会資源を活用して～」

講師：金川 洋輔 氏「厚生労働省 社会・援護局 障害保健福祉部 障害福祉課 地域生活支援推進室 障害福祉専門官 地域移行支援専門官（併任）」

(2) 講演内容

- ・施設入所支援・精神科病院の現状について
- ・地域移行支援の課題と東京都の取組
- ・地域移行支援で大事にしていたポイント
- ・地域での暮らしを支える社会資源と様々な方々の暮らしの例

(3) 講師のメッセージ（抜粋）

- ・施設入所支援や精神科病院からの地域移行者は増えているものの、退院困難な理由の3分の1が、“居住支援がない”という理由であること。
- ・地域移行支援の課題として、支援を受ける前提にある、本人の「支援を受けたい」という“意思形成”と“意思表示”を引き出すアプローチが弱いこと。
- ・地域移行支援の大事なポイントは、本人の気持ちに沿った支援方法を考えることと、本人が望む生活ができているかの2点であること。

3 第2部「パネルディスカッション」

(1) パネリスト（4名）

- ①重度訪問介護を利用している立場から（当事者と支援者の2名）
- ②自立生活援助を利用している立場から（当事者と支援者の2名）

(2) パネルディスカッション「重度訪問介護」の内容

①一人暮らしへの移行のステップ

- ・自閉症である当事者はグループホームに入居しており、時折、溜まったストレスが自傷や他害、物の破壊といった形で爆発していた。そのため、本人から「一人暮らしがしたい」という言葉があったが「心配」とも話しており、心情が揺れていた。
- ・居宅介護を行っている支援機関が相談にのり、試行的に、1週間の一人暮らしを体験した。それにより本人の不安が払しょくされ、スムーズに一人暮らしに移行した。

②本人の現在の生活と心境の変化

- ・平日は、ヘルパーと「はたらきばへ」へ行き、日中活動を行う。日中活動後は、ヘルパーと帰宅し、自分の時間に費やす(ヘルパーは見守り支援)。
- ・休日は、銭湯に行くなど、お出かけ等の楽しみが増えた。
- ・質問に対して主に“オウム返し”だった会話が、自立生活後、「〇〇を食べたい」などの“意思表示”に変化した。

③当事者ご本人の言葉

- ・「毎日、好きなものを食べて、好きな時間に寝れる。充実していて楽しい。」
- ・「自閉症の方は、変化が苦手とは言うけれど、私の大事なところ(日中活動や自宅などの居場所)で、安心な暮らしができれば、新しいチャレンジもできるよ。」

④重度訪問介護制度の課題

- ・グループホームの支給決定が、本人の入所前の住所地等であることに対し、重度訪問介護の支給決定が、本人の現在の住所地であること。
- ・グループホームから重度訪問介護を利用して一人暮らしをする際、必要とする支給量が足りないことが多いこと。

(3) パネルディスカッション「自立生活援助」の内容

①自立支援援助を利用したきっかけ

- ・母と二人暮らし。長く就労継続支援B型事業所に通っていたが、ステップアップしたい想いで、より多くの収入が見込めるA型事業所へ見学・実習を行った。
- ・作業内容や環境の変化から、体調を崩し入院(約3か月)。退院に向け、グループホームへの入居か、自立生活援助を利用しながら自宅で生活するか検討する。
- ・グループホームが見つからず、主治医や家族の希望から、自宅へ退院。主に家族へ生活上の不安や困りごとを相談していたが、関わる支援者への相談ができるよう、自立生活援助を利用することにした。

②自立生活援助の訪問時に行っていること

- ・状況や相談事を話す(生活リズム、服薬、通所)
- ・外出同行(近所への散歩、銭湯への同行) 等

③自立生活援助の利用により変化したこと

- ・支援者とより良い関係性がつくられ、行けなかった銭湯に行くことができた。
- ・本人には一人で生活できる能力はあるが、支援者とともに過ごす時間が楽しみになり、本人にとって必要不可欠なサービスとなった。

※上記は聴講内容の一部です。本セミナーの資料は、東京都ホームページ「令和4年度東京都自立支援協議会セミナー開催報告」に掲載されています。